



Title	日本語存在表現の歴史
Author(s)	金水, 敏
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47110
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文について をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	金 水 敏
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 0 7 5 5 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 18 年 12 月 27 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 名	日本語存在表現の歴史
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 蜂矢 真郷 (副査) 教 授 工藤真由美 助教授 岡島 昭浩

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、日本語の存在表現の歴史について国語学的に研究するものである。

第 1 部「「いる」と「ある」」は、第 1 章「存在表現の構造と意味」、第 2 章「古代語の「ある」と「あり」」、第 3 章「存在動詞「いる」の成立」、第 4 章「近世上方語・現代京阪方言の「いる」と「ある」」、第 5 章「近世江戸語・現代東京語・共通語の「いる」と「ある」」、第 6 章「「いる」「ある」の歴史的変化の方向性と推進力」、第 7 章「敬語の意味変化と「ござる」」からなり、第 2 部「「いる」と「おる」」は、第 8 章「上代・平安時代の「ある」と「をり」一状態化形式の推移」、第 9 章「平安時代の「をり」再考—卑語性の検討を中心に」、第 10 章「鎌倉時代の「をり」と文体 (附 室町時代・抄物)」、第 11 章「室町時代末～現代 上方・京阪方言の「おる」」、第 12 章「全国共通語「おる」の機能とその起源」、第 13 章「存在動詞の地理的分布」、第 14 章「存在型アスペクト形式の歴史概観」からなる。冒頭に「導入」を、末尾に「結語」を、また「主要資料一覧」「参考文献」「あとがき」「索引」を付す。(400 字詰換算約 830 枚)

日本語の基本的な存在動詞が、「ある (あり)」「いる (ゐる)」「おる (をり)」のように、三語もあることの問題から論を始め、第 1 部は、「いる」と「ある」との比較検討について述べ、第 2 部は、「いる」と「おる」との比較検討について述べる。第 1 章は、先行研究を挙げつつ、その問題点を整理し、存在文の分類について述べ、第 2 章～第 5 章は、上代から現代東京語・共通語に至る「いる (ゐる)」と「ある (あり)」の変遷をまとめ、第 6 章は、それらの歴史的変化の方向性・推進力について述べ、第 7 章は、敬語存在動詞「ござる」について補足的に述べる (第 1 部)。第 8 章～第 11 章は、上代から現代に至る「いる (ゐる)」と「おる (をり)」の変遷をまとめ、第 12 章は、共通語の「おる」と方言や役割語との関係について述べ、第 13 章は、方言の存在動詞の地理的分布について述べ、第 14 章は、それまでの検討を基にした現代語のスル・シタ・シテイル・シテイタに至るアスペクト形式の歴史的概観を試みている (第 2 部)。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

近年の日本語文法の研究は、現代語を中心とすることが多く、歴史的・通時的研究は必ずしも盛況とは言えない。そうした中で、本論文は、現代語の研究をよく理解した上での、本格的な歴史的・通時的な文法研究であり、まず、

その点が評価される。存在表現の研究は、一つの大きな研究課題であったが、それをこうした形で検討・整理し、その全体像を明らかにしたと言える。

検討の方法に関して、基本的な存在動詞三語の比較検討を行うにあたり、本論文は、「いる」と「ある」(第1部)、「いる」と「おる」(第2部)のように、二語ずつの比較により全体を整理するが、三語を一挙に比較するのは却って混乱を招きかねないので、これは理に叶っている。

また、上代から現代に至る三語の変遷を見るのはそれだけでも容易なことではないが、それにとどまらず、平安時代の和文と漢文訓読文との差違についても考慮に入れ、敬語との関連や、方言の問題にも踏み込み、そして、アスペクト形式の歴史的概観に及んでいて、本論文は、個別的問題に限らない全体的観点に立った研究である。さらには、申請者が別に研究を進めている役割語との関連もあり、今後の発展の一つの方向も示されている。

「ゐる」は、本来「座る」などの意の変化動詞であり、存在を表すものではなかったが、「たり」を伴った「ゐたり」の使用を契機として存在動詞になって行く経緯も、よく説明されている。「をり」の成立論の問題点もよく整理されていて、また、有生物主語と無生物主語との問題や、「おる(をり)」の卑語性についても、方言との関係を含めて、的確に述べられていると言える。「てある」「ている」などの、アスペクト形式の変遷と、存在表現との関係も、よく検討されていると言ってよい。

検討した資料も、本文中に出典の表示があるものを除いた「主要資料一覧」が9ページ強に至るように、相当の量に及んでいる。無論、検討に及んでいない資料もない訳ではないが、当面の全体像を示すには十分であろう。

他方、存在文の意味的分類にあたっては、時間的限定性について考えてほしい面があり、また、「いる」と「いない」とについて今少し検討してほしいところがある。また、申請者自身の、本論文に収めていない研究や収めている研究をしばしば参考文献に挙げることは、先行研究の多さと、論争をも含む研究の進展の経緯があることからやむをえない面もあるが、さらによいまとめ方ができないものかとも思われる。第1部で検討する時代の括り方と、第2部のそれとが一致しないのは、それなりに理由のあることではあるが、体系性の点で今少し統一を試みてほしいところである。関連する多くの問題に踏み込んだことにより、それぞれにその個別的研究がさらに必要になる点もないではない。

しかしながら、本論文は、先に見たように、日本語の存在表現の歴史的研究として評価できる点を多く持つものである。よって、本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。